前

令和５年度

前期日程入学試験問題

総合問題Ａ

注意事項

1　試験開始の合図があるまで，この冊子を開いてはいけません。

2　問題冊子（27ページ）には，解答用紙（生物資源科学部及び保健福祉学部３枚・地域創生学部３枚）と下書き用紙（両面印刷各１枚）が挟み込んであります。試験開始の合図があったら，直ちに中を確かめ，印刷や枚数の不備などがあった場合，監督者に申し出なさい。

3　受験する学部によって指定された箇所の問題に解答しなさい。

生物資源科学部・保健福祉学部	3－13ページ
地域創生学部	15－27ページ

4　問題冊子の間に挟み込んである解答用紙を取り出し，受験する学部のすべての解答用紙の所定欄に受験番号を記入しなさい。

5　解答はすべて，受験する学部が指定する解答用紙の所定欄に横書きで記入しなさい。間違って他の学部用の解答用紙に記入しても，回収しません。

6　句読点は，一字と数えなさい。

7　試験室で配付された問題冊子及び下書き用紙は，退出時に持ち帰りなさい。

このページは白紙です。

【英語の課題文を含まない】

生物資源科学部　地域資源開発学科
保健福祉学部　　保健福祉学科

【英語の課題文を含まない】

生物資源科学部　地域資源開発学科

保健福祉学部　保健福祉学科

課題文①・②・③を読んで，以下の問いに答えなさい。

問１　課題文①の筆者は「文化」をどのようなものだと考えているか，70字以内で説明しなさい。

問２　課題文②の下線部(ア)について，

(1)　「誇りの空洞化」とはどういうことか，説明しなさい。

(2)　筆者は「誇りの空洞化」をもたらした要因をどのように考えているか，140字以内で説明しなさい。

問３　課題文③の下線部(イ)に「もっと大切なものが潜んでいる」とあるが，筆者はそれをどのようなことだと考えているか，80字以内で説明しなさい。

問４　課題文③の下線部(ウ)について，地域はなぜ「学ばねば見えないもの」になったのか，80字以内で説明しなさい。

問５　あなたが考える「地域」とはどのようなものか，課題文①・②・③の内容を踏まえ，あなたがこれから大学で学ぼうとしていることと関連づけて，具体例を挙げながら，600字以内で述べなさい。

課題文①

「文化」の定義は幅広く，ある意味では暮らしを向上させる工夫のすべてといってもよい。『広辞苑』によると「人間が自然に手をかけて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ，技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容を含む」とされる。たとえば，海や山などの自然状態に対して，狩，漁，野草採集，調理，集落における暮らし方，信仰，季節の行事や行事食，芸能など，およそ人間が生活するために手を加えたもの，より快適に生活するために創りだしたことのすべてを「文化」ととらえることができる。暮らしのための知恵や道具，伝承されてきた技，生活を豊かにする歌や踊り，工芸品など，文化は私たちにとって身近なものである。

このように生活そのものが文化であるといえるが，特に歴史的，学術的，芸術的価値が高い遺産や習俗を社会共有の財産として大切に守るという考え方で，「文化財」を認定することが世界各国でおこなわれている。日本でも戦前から史跡や建造物，美術工芸品などの重要文化財が指定されている。戦後1950年に制定された文化財保護法で，文化財と定義されているものは有形・無形文化財，民俗文化財など6項目にわたっている（表参照）。1975年の改正によって，衣食住，生

表　「文化財」の定義（文化財保護法第２条）

	名　称	主な対象
①	有形文化財	建造物，絵画，彫刻，工芸品，考古資料など
②	無形文化財	演劇，音楽，工芸技術などの文化的所産
③	民俗文化財	衣食住，生業，信仰，年中行事などに関する風俗慣習，民俗芸能，民俗技術など
④	歴史上または学術上価値の高いもの（記念物）	貝塚，古墳，城跡，旧宅などの遺跡で歴史上または学術上価値の高いもの，庭園，橋梁（きょうりょう），峡谷，海浜，山岳などの名勝地 動物（生息地，繁殖地，渡来地を含む），植物（自生地を含む），地質鉱物
⑤	文化的景観	生活または生業および地域の風土により形成された景観地
⑥	伝統的建造物群	周囲の環境と一体をなして歴史的風致を形成している伝統的な建造物群

業，信仰，年中行事などに関する風俗慣習，民俗芸能，民俗技術など，人々が日常生活のなかで生みだし継承してきた無形の民俗文化財のうち，特に重要なものを国が指定する制度も発足した。また伝統的建造物群に関して，重要伝統的建造物群保存地区の制度が創設された。

ここであげられている有形・無形の文化財や景観・遺産などは，現在，各地で「地域文化」を継承・創造するとりくみのよりどころ，評価の基準となっている。しかし住民の日常生活の慣習となっている民俗的な行事や郷土の食などを，人々があえて「文化財」として認識することはあまりない。歴史的，文化的価値があると意識されなくとも，その地域独特の風土や歴史のなかで，人々が意味を見出して伝えてきたこと，習わしとしてきたことなど，「文化」はその土地の精神生活と結びついている。「文化」は，ある意味であたりまえに生活の営みとともに継承されているものであり，あらためてその価値を認識しなおす契機がなければ，生活変容のなかでどこかに追いやられて消失してしまうことも多いのである。

認定を受けた民俗文化財も，人々がそれを暮らしのなかで維持，継承し，次世代に引き継いでいく営みが重要である。それは単なる保存ではなく，新たな担い手を育てるという創造の過程を含んでいるといえる。

柳田國男は，近代化のなかで消失しつつある民俗文化・習俗について「郷土生活の研究法」を著している。そのなかで，「郷土人の心の奥の機微は，外から見たり聞いたりしたのではとうてい分かりようもなく，結局彼ら自身の自意識に俟つよりほかに仕方はないのである」と述べて，郷土を知るということは人々の「自己内部の省察」にほかならないと説いた。

文字の無い世界で，あるいは文字を書けない人々によって「民間伝承」されてきた文化に注目し，民俗学や郷土史学などの研究者によって，有形・無形の膨大な民俗文化が「文化財」として採集され，記録されてきた。今日，「地域文化」あるいは「地域と文化」の問題を考えるうえで，柳田國男が提起した郷土人自身による「自己内部の省察」は，人々が見過ごしてきた価値をあらためて再認識し，その意味をとらえなおすうえで重要である。

佐藤一子『地域文化が若者を育てる―民俗・芸能・食文化のまちづくり』

（一般社団法人農山漁村文化協会，2016年）による。一部改変。

課題文②

中山間地域に広がる美しい田園風景，これが文化財だと言ったら皆さんはどう思うだろうか。文化財と言えば，ふつう神社，寺，仏像，城郭などを思い浮かべるが，文化財保護法（1950年）では，「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」（第2条）を「文化的景観」と定義し，貴重な国民的財産として文化財に位置づけている。またその中で特に重要なものは「重要文化的景観」として，保存と活用に対する支援が行われており，一関本寺の農村景観（岩手県）など多くの農山村景観が選定されている。

文化的景観がこのように位置づけられたのは，世界的に棚田やワインのぶどう畑など農林水産業に関連する文化的景観が注目され，1992年にユネスコが世界遺産の登録対象に盛り込んだことがその契機であった。優れた農村景観の基盤には，農地，水路，農法，古民家，さらには祭事，行事儀礼，民俗芸能などの数多くの文化遺産があり，これら景観に内在する文化的価値を総体的に保存し活用することの重要性が，世界的にも国内でも認識されるようになったのである。

中山間地域の農村を見ると，神楽，能，祭りなど有形，無形の文化資源も豊富に受け継がれている。壬生（みぶ）の花田植（広島県北広島町）のようなユネスコ無形文化遺産もあるし，重要無形民俗文化財に指定されているものも多い。

農村にはこのように豊かな文化が存在するのだが，考えてみれば，「文化」という言葉はラテン語から派生したcultureの訳語で，「耕す」が原義であり，もともと農業や土地と深い関係を持つ。私たちの生活の中でも，正月，花見，端午の節供，秋祭りなど年中行事の多くは，もともと豊作を祈り感謝する農耕の祭事に由来するものであり，古来，農業は日本文化の基盤を育んできた。しかも日本列島ではその地理的・生態的な条件に応じて多彩な生業が営まれてきたから，全国の農村には多様な文化伝統が受け継がれてきた。

しかしながら，明治以後の近代化はこのような地域固有の生活文化の伝統を「遅れたもの」として否定する風潮を生み出し，戦後は経済成長や都市への人口移動に伴い地域独自の文化伝統は徐々に失われていった。こうした流れは高度成長が終わり「地方の時代」が叫ばれた1980年頃から変わってくるのだが，農山村について言えば，「山村」の定義を「林野面積の占める比率が高く，交通条件

および経済的，文化的諸条件に恵まれず，産業の開発の程度が低く，かつ，住民の生活文化水準が劣っている山間地その他の地域」（第２条）とする旧・山村振興法の規定が2015年まで存在したのである。もちろんこの間においても農山村においては，祭りや伝統芸能など個々の伝統文化は大切に継承されてきたし，イタリアの農村におけるアグリツーリズモ(*1) やスローフード・スローシティ運動(*2) に倣(なら)おうという動きもあった。だが，文化による地域づくりという点では農山村の動きは鈍かった。

中山間地域の振興と言えば，これまで人口や経済が中心的テーマだったが，これからは，ライフスタイルなどを含む広い意味での「文化」の視点を加えるべきではないか。

振り返ってみれば，中山間地域は，経済の高度成長の中で人口が減少し続け，農林地の荒廃や集落機能の低下が進んできたが，何より私たちの心を痛めるのは，地域の人々がそこに住み続ける誇りを失う(7)「誇りの空洞化」が進んでいるということである。そこでは所得格差など経済的な要因もさることながら，前述したような「文化的諸条件に恵まれずに」「住民の生活文化水準が劣った地域」と見る風潮が地域の人々の自信と誇りを失わせてきたように思えてならない。

だが人々の認識は大きく変わりつつある。「文化的景観」の議論で見たように，農村に受け継がれてきた豊かな文化は内外で高く評価されるようになっている。また，田園回帰の潮流は単なる人口移動ではなく，若者や女性の価値観の変化を如実に反映し，中山間地域の農山村は「新しい価値観やライフスタイル，新しいビジネスモデルやイノベーションを実現できるフロンティア地域」と考えられるようになった。そこでは移住者と地元住民の交流で地域の新しい価値が創造され，新しい文化も芽生えている。今や，中山間地域の農山村こそ，古来継承してきた個性豊かな文化に自信を持ち，磨きあげ，新たな地域文化を育んでいくべき時ではないか。

先進事例から学ぶ教訓としては，第１に，伝統文化を活かしつつ新しい文化を創造することである。地域に祭り，伝統芸能など素晴らしい文化が継承されているにしても，過去の文化遺産をそのまま継承するだけでは，担い手が高齢者など従来の住民に限られてしまいかねない。田園回帰した新しい住民も参加する地域文化活動で新しい文化伝統を創造していけば，地域の新しい魅力づくりにもなるし，地域の人々の結びつきを強めることにもなる。第２は，地域の歴史，豊かな

自然，農林業，祭り，行事，伝承などを総合して地域文化の魅力を語るストーリーを作ることである。地域の地理的・生態的条件や歴史と関連づけてなぜこのような農業や特産品が発展し，伝統芸能，伝統食など特色ある文化が形成されたかといった物語が発信できるようになれば地域の誇りとなるのではないか。

農村文化は，本来ローカルで個性的であり，そこが魅力でもあるが，同時にグローバルに通じる価値も持つ。考えてみれば，古来，日本は照葉樹林文化やナラ林文化の地域として，さらには水田稲作文化の地域として，アジア地域の国々と共通の生活文化を持ち，今もその文化伝統は農山村に色濃く残っている。また明治時代に東北地方を旅した英国人女性イザベラ・バードは，米沢盆地の農村風景を「エデンの園」と絶賛したが（『日本奥地紀行』平凡社，1975年），近年は日本の農山村の景観や文化に魅力を感じる外国人旅行者も増加している。

かつて東京大学名誉教授の木村尚三郎氏は，「ヨーロッパでは田舎の方が大都会より文化が上」と説きつつ日本の新しい「農」の時代を予見したが，まさに今，新しい「田園文化」の時代が始まっているのである。中山間地域の農山村の人々も，今こそ「文化力」を活かした地域づくりに自信を持って取り組み，世界に発信していただきたいと思う。

野中和雄「農村景観と田園文化」，佐藤洋平・生源寺眞一監修，特定非営利活動法人中山間地域フォーラム編『中山間地域ハンドブック』（一般社団法人農山漁村文化協会，2022年）による。一部改変。

注

*1 アグリツーリズモ……イタリア語で「農業」を意味する“agricoltura”と「観光」を意味する“turismo”を組み合わせた造語。

*2 スローフード・スローシティ運動……スローフード運動は，ファストフードに対する考え方で，その土地の伝統的な食文化や食材を見直す運動。スローシティ運動はその延長線上にあり，農産物や生活，歴史，文化，自然，環境など，地域の個性や多様性を尊重して新たなまちづくりを目指す。

課題文③

地域を学ぶこととは，「私」が誰なのかを知ることである。私は必ずどこかの地域にいる。その足は何らかの地域に接している。その地域のことを知らずして，私とは何かを語ることはできない。

もっとも，では「地域とは何か」が「私」よりも自明なのかといえば，決してそんなことはない。「地域とは何か」はなかなか厄介な問いなのである。

地域は多様である。それはただ地域に様々あるというだけではない。「私」が自分の周りをどんなふうにとらえているかによって多様に現れる。試しに誰でもよい，「あなたにとって地域ってなに？」とたずねてみればよい。どう答えるだろうか。

答えは人によって，またその受け答えの文脈によって，大きく異なるものになるはずだ。「いま住んでいる八王子市のことかな」という人もいれば，「うちの実家の集落」という人もいるだろう。「神奈川県」という答えもあれば，「関西」や「九州」とより広い範囲で示されることもある。では，どれが正解なのだろうか。

どれも「地域」でよいのである。

さらにはこうもいえる。諸外国から見れば，「日本」や「アジア」も「地域」である。いやそれどころか，このさき出会うかもしれない宇宙人にとってみれば，この地球や太陽系でさえ「地域」になる。そしてその地域は，例えば国境や県境が変わることによって，その姿は変化する。地域は決して固定化された何らかの空間ではない。それは文脈によって見方によって，そして時代によって変わるものである。

いやむしろこう考えるべきものなのである。「地域」はそもそも，誰かが世界の一部を切り取ることによって浮かび上がってくるものであると。

何かを切り取らないと地域は出てこない（地域は境界性をもつ）。そして，その「切り取り方」にも色んなやり方があって，それは文脈にもよれば，時代によっても違う（地域は文化性・歴史性をもつ）。

いや，もっとこういうべきである。そもそも世界のすべてはつながっている。どこかで切れ切れになっていて，「地域」がきれいに分かれているなどということはない。すべてはつながっているのだが，そのつながっているもののなかから，何らかの固まりを切り出してきたときに「地域」は立ち現れる。しかもそれが，

全体の一部でありながら決して断片ではなく，それのみでなお一つの全体でありうるもの，それが地域である（地域は統一性・総合性をもつ）。

「地域」とはこうして，ゴロリとそこに横たわっているようなものではない。互いにつながりあっている世界の中から，何らかの固まりを見つけ，切り出してくる者がいるから「地域」になるのである。地域はだから，その「切り出してくる者」の立場やものの見方によって変わる。その者の見方がしっかりしていれば地域はしっかり示される。逆にその者の見方がぼんやりとしていれば，地域はぼんやりとしか見えないことになる。

さて，地域学の学びの中で，対象となる地域を世界の中から切り出してくる者——それこそがほかならぬ「私」である。どんな地域を切り取ることができるかは，「私」が世界をどう見ているかにかかっている。とすると，先の「足もとの地域を知ることが，自分を知ることにつながる」は，もう一度，別な形で裏返ることにもなるわけだ。すなわち，「地域を知るためには，自分を知らねばならない」と。

漠然と世界を見ているかぎり，地域についての認識もまた漠然としたものにしかならない。地域はそれを切り取る者の見方を反映する。地域を知ることと，私を知ることは同一の事象の裏表である。「地域ってなに？」と聞かれてその人が答えた答えの中に，その人自身が含まれる。地域学とは，地域と自分を同時に学び，深めていくことである。漠とした世界の中からしっかりと地域を切り出し，うまく見出すことができたなら，そのことによって自分自身の認識が深まったことになる。地域がよりよく見えるようになることとは，自分のものの見方を鍛え，自分という存在を高めていくことである。そしてそのように自分を高めることによって，地域もまた以前よりはっきりとその姿を現すようになっていく——。

もっとも，自分自身を高めるためといってしまえば，「学び」はみな同じである。地域学だけが特別なのではない。だが，地域学の学びには，他からは一歩進んだ，(イ)もっと大切なものが潜んでいる。このことを最初にきちんと確認しておこう。

人は必ずどこかの時空（時間・空間）に存在する。そして地域を切り取ることとは，ある特定の時空を一つの固まりとして切り出してくることである。

本来，空間は果てしなく広がり，時間は延々と切れ目なくつづく。その中からある場所を一つの地域として取り出すこととは，ものごとを時空の中に見定め，その見定めを行う自分自身を時空の中に確たる存在としてつなぎとめることである。逆に言えば，地域が見えない人とは，自分が存在している時空が見えていな

い人だということにもなる。

だが，単に時空を認識することが地域なのではない。より重要なのは次の点にある。

地域―― 一定の境界のうちにあり，歴史の中にあり，総合的である地域――は，単なる時空の認識ではない。それは，私の生をとりまく，様々なものごとの深いつながりである。地域とは，私が生きている条件，その環境，自分を生かしてくれている仕組みそのものである。地域を知るということは，単なる時空を，自分という存在を可能にしてくれる条件として描き出すことにほかならない。

地域学とは要するに，抽象的な言語や理論を学ぶものではなく，具体的な時空にいる私を，特定の生態環境のうちに照らし出していく，そんな学びの作業なのである。私を漠たる世界の中に確定し，地域のうちに，“生きているもの”として浮かび上がらせ，見定めていくこと――こうした作業を通じて現れてくる「私」のことを専門用語では，「アイデンティティ（自己同一性，自己同定性）」とか，「実存」などと表現するが，そうした自己同定作業のうち，最も基本となる作業が地域学である。

とはいえ，なぜこんなことが必要なのだろうか。

それはおそらく私たちがいま，とんでもなく大きな変化の中にいるからである。

それは，以前であればその存在が当たり前であった地域が雲散霧消してしまう結果さえもたらしそうな変化である。

都市の拡大は多くの村や町を押しつぶし，新興住宅地に変えてしまった。バイパス沿いのモールやインターネットによる通販の販売力は中心市街地の商店街を凌駕（りょうが）し，シャッター通りを生んでいる。首都や大都市の都心では地価の高騰とともに巨大な高層ビルが立ち並んで地域を一掃し，グローバル化は国の枠を越えて人々をごちゃ混ぜに攪拌（かくはん）しはじめている。むらやまちが壊れていく。都市の形がぼやけていく。この半世紀ほどの間に生じたことが，私たちの地域のあり方を根本から変え，人間存在のあり方を大きく変えつつある。

いやそれどころか，この日本という国のかたちさえ，このままでいられるのかわからぬほどの大きな変化を世界は遂げており，他方でナショナリズムの横行は，地域の形どころか国家の形，世界の形をさらに大きく変えていきそうである。

それゆえ，こういう人も多いのだと思う。「地域が大切なのはわかります。でも，私にはそんなふうに自分を見いだせるような地域がないんです」と。場合によっ

ては，それがコンプレックス（劣等感）になっている人も。いや，近年はむしろ開き直って「現在のような世界情勢の中では国家こそが大事であり，その内側にある地域なんか無用だ」と，そういう感覚でこの変化を見ている人も現れてきた。

だがそれでもなお，私たちはそれぞれ地域のうちに生きているのである。地域というものの上にしか，なおも私たちは生きられないと言った方がよいだろう。地域が見えない／不要だというのは，その人の見方が悪いからそうなるのにすぎず，人は必ずどこか特定の地域のうちに暮らしている。見えるはずのものが見えていない。必要なものが必要と思われていない――それをしっかりと見えるものにしていこうというのが，地域学の目指す目標である。

かつては地域は目の前に生き生きと存在し，それを学ぶ必要などないものだった。地域はそこにふつうに見えすぎるほど見えていた。(ウ)いまやそれは学ばねば見えないものになっている。

現在起きている変化はとてつもなく大きく，その変化によって，本来ふつうに見えていたはずのものが濃い霧の向こうに隠れている。先ほど見方が悪いから地域が見えないのだと述べたが，必ずしもその人の努力が足りないから，能力が欠けているから見えないのではない。地域はいまや覆い隠されているのである。

この覆いをしっかりと取り除き，見るべきものを見えるようにしていくこと。地域学とは，そのための努力や技術が必要となった現代社会状況の中で，地域を適確に切り出し，とらえていくための認識法である。そしてその習得を通じて，自分自身の存在を確たる時空の上に取り戻すための学びである。

山下祐介『地域学入門』（ちくま新書，2021 年）による。一部改変。

このページは白紙です。

【英語の課題文を含む】

地域創生学部　地域創生学科

【英語の課題文を含む】

地域創生学部　地域創生学科

課題文①・②・③・④を読んで，以下の問いに答えなさい。

問1　課題文①の筆者は「文化」をどのようなものだと考えているか，70字以内の日本語で説明しなさい。

問2　課題文②の下線部(ア)について，

(1)「誇りの空洞化」とはどういうことか，日本語で説明しなさい。

(2) 筆者は「誇りの空洞化」をもたらした要因をどのように考えているか，140字以内の日本語で説明しなさい。

問3　課題文③の下線部(イ)“rural amenities”とはなにか，50字以内の日本語で説明しなさい。

問4　課題文③の下線部(ウ)に“the present distribution of amenity value should not imply that other natural and cultural features being without present value can be allowed to disappear”とあるが，このように説明されるのはなぜか，身近な例を挙げながら日本語で説明しなさい。

問5　あなたが考える「地域」とはどのようなものか，課題文①・②・③・④の内容を踏まえ，あなたがこれから大学で学ぼうとしていることと関連づけて，具体例を挙げながら，500字以内の日本語で述べなさい。

課題文①

「文化」の定義は幅広く，ある意味では暮らしを向上させる工夫のすべてといってもよい。『広辞苑』によると「人間が自然に手をかけて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ，技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容を含む」とされる。たとえば，海や山などの自然状態に対して，狩，漁，野草採集，調理，集落における暮らし方，信仰，季節の行事や行事食，芸能など，およそ人間が生活するために手を加えたもの，より快適に生活するために創りだしたことのすべてを「文化」ととらえることができる。暮らしのための知恵や道具，伝承されてきた技，生活を豊かにする歌や踊り，工芸品など，文化は私たちにとって身近なものである。

このように生活そのものが文化であるといえるが，特に歴史的，学術的，芸術的価値が高い遺産や習俗を社会共有の財産として大切に守るという考え方で，「文化財」を認定することが世界各国でおこなわれている。日本でも戦前から史跡や建造物，美術工芸品などの重要文化財が指定されている。戦後 1950 年に制定された文化財保護法で，文化財と定義されているものは有形・無形文化財，民俗文化財など 6 項目にわたっている（表参照）。1975 年の改正によって，衣食住，生

表　「文化財」の定義（文化財保護法第２条）

	名　称	主な対象
①	有形文化財	建造物，絵画，彫刻，工芸品，考古資料など
②	無形文化財	演劇，音楽，工芸技術などの文化的所産
③	民俗文化財	衣食住，生業，信仰，年中行事などに関する風俗慣習，民俗芸能，民俗技術など
④	歴史上または学術上価値の高いもの（記念物）	貝塚，古墳，城跡，旧宅などの遺跡で歴史上または学術上価値の高いもの，庭園，橋梁（きょうりょう），峡谷，海浜，山岳などの名勝地 動物（生息地，繁殖地，渡来地を含む），植物（自生地を含む），地質鉱物
⑤	文化的景観	生活または生業および地域の風土により形成された景観地
⑥	伝統的建造物群	周囲の環境と一体をなして歴史的風致を形成している伝統的な建造物群

業，信仰，年中行事などに関する風俗慣習，民俗芸能，民俗技術など，人々が日常生活のなかで生みだし継承してきた無形の民俗文化財のうち，特に重要なものを国が指定する制度も発足した。また伝統的建造物群に関して，重要伝統的建造物群保存地区の制度が創設された。

ここであげられている有形・無形の文化財や景観・遺産などは，現在，各地で「地域文化」を継承・創造するとりくみのよりどころ，評価の基準となっている。しかし住民の日常生活の慣習となっている民俗的な行事や郷土の食などを，人々があえて「文化財」として認識することはあまりない。歴史的，文化的価値があると意識されなくとも，その地域独特の風土や歴史のなかで，人々が意味を見出して伝えてきたこと，習わしとしてきたことなど，「文化」はその土地の精神生活と結びついている。「文化」は，ある意味であたりまえに生活の営みとともに継承されているものであり，あらためてその価値を認識しなおす契機がなければ，生活変容のなかでどこかに追いやられて消失してしまうことも多いのである。

認定を受けた民俗文化財も，人々がそれを暮らしのなかで維持，継承し，次世代に引き継いでいく営みが重要である。それは単なる保存ではなく，新たな担い手を育てるという創造の過程を含んでいるといえる。

柳田國男は，近代化のなかで消失しつつある民俗文化・習俗について「郷土生活の研究法」を著している。そのなかで，「郷土人の心の奥の機微は，外から見たり聞いたりしたのではとうてい分かりようもなく，結局彼ら自身の自意識に俟つよりほかに仕方はないのである」と述べて，郷土を知るということは人々の「自己内部の省察」にほかならないと説いた。

文字の無い世界で，あるいは文字を書けない人々によって「民間伝承」されてきた文化に注目し，民俗学や郷土史学などの研究者によって，有形・無形の膨大な民俗文化が「文化財」として採集され，記録されてきた。今日，「地域文化」あるいは「地域と文化」の問題を考えるうえで，柳田國男が提起した郷土人自身による「自己内部の省察」は，人々が見過ごしてきた価値をあらためて再認識し，その意味をとらえなおすうえで重要である。

佐藤一子『地域文化が若者を育てる―民俗・芸能・食文化のまちづくり』

（一般社団法人農山漁村文化協会，2016年）による。一部改変。

課題文②

中山間地域に広がる美しい田園風景，これが文化財だと言ったら皆さんはどう思うだろうか。文化財と言えば，ふつう神社，寺，仏像，城郭などを思い浮かべるが，文化財保護法（1950年）では，「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」（第2条）を「文化的景観」と定義し，貴重な国民的財産として文化財に位置づけている。またその中で特に重要なものは「重要文化的景観」として，保存と活用に対する支援が行われており，一関本寺の農村景観（岩手県）など多くの農山村景観が選定されている。

文化的景観がこのように位置づけられたのは，世界的に棚田やワインのぶどう畑など農林水産業に関連する文化的景観が注目され，1992年にユネスコが世界遺産の登録対象に盛り込んだことがその契機であった。優れた農村景観の基盤には，農地，水路，農法，古民家，さらには祭事，行事儀礼，民俗芸能などの数多くの文化遺産があり，これら景観に内在する文化的価値を総体的に保存し活用することの重要性が，世界的にも国内でも認識されるようになったのである。

中山間地域の農村を見ると，神楽，能，祭りなど有形，無形の文化資源も豊富に受け継がれている。壬生（みぶ）の花田植（広島県北広島町）のようなユネスコ無形文化遺産もあるし，重要無形民俗文化財に指定されているものも多い。

農村にはこのように豊かな文化が存在するのだが，考えてみれば，「文化」という言葉はラテン語から派生したcultureの訳語で，「耕す」が原義であり，もともと農業や土地と深い関係を持つ。私たちの生活の中でも，正月，花見，端午の節供，秋祭りなど年中行事の多くは，もともと豊作を祈り感謝する農耕の祭事に由来するものであり，古来，農業は日本文化の基盤を育んできた。しかも日本列島ではその地理的・生態的な条件に応じて多彩な生業が営まれてきたから，全国の農村には多様な文化伝統が受け継がれてきた。

しかしながら，明治以後の近代化はこのような地域固有の生活文化の伝統を「遅れたもの」として否定する風潮を生み出し，戦後は経済成長や都市への人口移動に伴い地域独自の文化伝統は徐々に失われていった。こうした流れは高度成長が終わり「地方の時代」が叫ばれた1980年頃から変わってくるのだが，農山村について言えば，「山村」の定義を「林野面積の占める比率が高く，交通条件

および経済的，文化的諸条件に恵まれず，産業の開発の程度が低く，かつ，住民の生活文化水準が劣っている山間地その他の地域」（第２条）とする旧・山村振興法の規定が 2015 年まで存在したのである。もちろんこの間においても農山村においては，祭りや伝統芸能など個々の伝統文化は大切に継承されてきたし，イタリアの農村におけるアグリツーリズモ(*1) やスローフード・スローシティ運動(*2) に倣(なら)おうという動きもあった。だが，文化による地域づくりという点では農山村の動きは鈍かった。

中山間地域の振興と言えば，これまで人口や経済が中心的テーマだったが，これからは，ライフスタイルなどを含む広い意味での「文化」の視点を加えるべきではないか。

振り返ってみれば，中山間地域は，経済の高度成長の中で人口が減少し続け，農林地の荒廃や集落機能の低下が進んできたが，何より私たちの心を痛めるのは，地域の人々がそこに住み続ける誇りを失う(7)「誇りの空洞化」が進んでいるということである。そこでは所得格差など経済的な要因もさることながら，前述したような「文化的諸条件に恵まれずに」「住民の生活文化水準が劣った地域」と見る風潮が地域の人々の自信と誇りを失わせてきたように思えてならない。

だが人々の認識は大きく変わりつつある。「文化的景観」の議論で見たように，農村に受け継がれてきた豊かな文化は内外で高く評価されるようになっている。また，田園回帰の潮流は単なる人口移動ではなく，若者や女性の価値観の変化を如実に反映し，中山間地域の農山村は「新しい価値観やライフスタイル，新しいビジネスモデルやイノベーションを実現できるフロンティア地域」と考えられるようになった。そこでは移住者と地元住民の交流で地域の新しい価値が創造され，新しい文化も芽生えている。今や，中山間地域の農山村こそ，古来継承してきた個性豊かな文化に自信を持ち，磨きあげ，新たな地域文化を育んでいくべき時ではないか。

先進事例から学ぶ教訓としては，第１に，伝統文化を活かしつつ新しい文化を創造することである。地域に祭り，伝統芸能など素晴らしい文化が継承されているにしても，過去の文化遺産をそのまま継承するだけでは，担い手が高齢者など従来の住民に限られてしまいかねない。田園回帰した新しい住民も参加する地域文化活動で新しい文化伝統を創造していけば，地域の新しい魅力づくりにもなるし，地域の人々の結びつきを強めることにもなる。第２は，地域の歴史，豊かな

自然，農林業，祭り，行事，伝承などを総合して地域文化の魅力を語るストーリーを作ることである。地域の地理的・生態的条件や歴史と関連づけてなぜこのような農業や特産品が発展し，伝統芸能，伝統食など特色ある文化が形成されたかといった物語が発信できるようになれば地域の誇りとなるのではないか。

農村文化は，本来ローカルで個性的であり，そこが魅力でもあるが，同時にグローバルに通じる価値も持つ。考えてみれば，古来，日本は照葉樹林文化やナラ林文化の地域として，さらには水田稲作文化の地域として，アジア地域の国々と共通の生活文化を持ち，今もその文化伝統は農山村に色濃く残っている。また明治時代に東北地方を旅した英国人女性イザベラ・バードは，米沢盆地の農村風景を「エデンの園」と絶賛したが（『日本奥地紀行』平凡社，1975年），近年は日本の農山村の景観や文化に魅力を感じる外国人旅行者も増加している。

かつて東京大学名誉教授の木村尚三郎氏は，「ヨーロッパでは田舎の方が大都会より文化が上」と説きつつ日本の新しい「農」の時代を予見したが，まさに今，新しい「田園文化」の時代が始まっているのである。中山間地域の農山村の人々も，今こそ「文化力」を活かした地域づくりに自信を持って取り組み，世界に発信していただきたいと思う。

野中和雄「農村景観と田園文化」，佐藤洋平・生源寺眞一監修，特定非営利活動法人中山間地域フォーラム編『中山間地域ハンドブック』（一般社団法人農山漁村文化協会，2022年）による。一部改変。

注

*1 アグリツーリズモ……イタリア語で「農業」を意味する“agricoltura”と「観光」を意味する“turismo”を組み合わせた造語。

*2 スローフード・スローシティ運動……スローフード運動は，ファストフードに対する考え方で，その土地の伝統的な食文化や食材を見直す運動。スローシティ運動はその延長線上にあり，農産物や生活，歴史，文化，自然，環境など，地域の個性や多様性を尊重して新たなまちづくりを目指す。

課題文③

The term (1)"rural amenities" refers to a wide range of natural and man-made features of rural areas, including wilderness, cultivated landscapes, historical monuments, and even cultural traditions. Amenities are distinguished from more ordinary features of the countryside because they are recognised* as having specific societal or economic value. These are places and traditions from which individuals, communities or society at large* derive* utility. It is this utility and corresponding* *value* that allows rural amenities to be considered as important resources for rural development. (中略)

When people enjoy a scenic rural landscape, the value embodied* in the landscape is realised* without the need for an intermediate production process. For example, while the rural landscape is often a by-product* of some production process (as in the case studies of terraced rice fields* in Japan or farmed mountain pastures* in Austria), it was not expressly created to be an amenity. This direct "consumer value" of amenities differentiates them from goods that have value as inputs into a production process, for example, trees with value as timber, or rivers with value as hydroelectric power. The consumer value stems from an amenity's existence and condition. Even so, amenities often require some inputs (such as roads or hotel accommodation) to make them accessible to visitors.

Amenities have a strong territorial connotation*. Their value stems* from unique attributes* of a given region. These features can be both physical and cultural or a combination of the two. In the case study of Japan, Yoshinaga (1997)* introduced the term *fudo* to express the interaction that has existed throughout history between nature and human beings in a particular area and how this *fudo* has shaped unique landscapes, lifestyles and productive activities.

The natural environment is also an important source of rural amenities. However, all natural resources do not currently have value as rural amenities. The natural environment has value as the life-sustaining habitat* for humans

and other living creatures. By contrast, the utility of the natural environment as amenities is associated with aesthetic* and recreational attributes valued only in certain areas. Because the habitat and amenity values of the natural environment differ, strategies to provide optimal levels of each differ and may sometimes conflict.

Finally, the criteria for assigning value to amenities should be seen as evolving. Tastes and preferences change over time, adding value to some natural and cultural features and reducing the value of others. From this perspective, natural and cultural features have a potential future value — which cannot be anticipated. As such, (ウ)the present distribution of amenity value should not imply that other natural and cultural features being without present value can be allowed to disappear.

Adapted from "Cultivating Rural Amenities: An Economic Development Perspective," OECD Publishing (1999), https://doi.org/10.1787/9789264173941-en

注

recognised：recognized のイギリスつづり
at large：全体として，一般に
derive：導き出す，得る
corresponding：付随する
embodied： 具体化された，抽象化された
realised：realized のイギリスつづり
by-product：副産物
terraced rice fields：棚田
pastures：牧草地
territorial connotation：地域の関連性
stems：起因する
attributes：特質，特性
Yoshinaga (1997)：吉永健治の 1997 年の論考
habitat：生息地
aesthetic：美の，美に関する

課題文④

地域を学ぶこととは，「私」が誰なのかを知ることである。私は必ずどこかの地域にいる。その足は何らかの地域に接している。その地域のことを知らずして，私とは何かを語ることはできない。

もっとも，では「地域とは何か」が「私」よりも自明なのかといえば，決してそんなことはない。「地域とは何か」はなかなか厄介な問いなのである。

地域は多様である。それはただ地域に様々あるというだけではない。「私」が自分の周りをどんなふうにとらえているかによって多様に現れる。試しに誰でもよい，「あなたにとって地域ってなに？」とたずねてみればよい。どう答えるだろうか。

答えは人によって，またその受け答えの文脈によって，大きく異なるものになるはずだ。「いま住んでいる八王子市のことかな」という人もいれば，「うちの実家の集落」という人もいるだろう。「神奈川県」という答えもあれば，「関西」や「九州」とより広い範囲で示されることもある。では，どれが正解なのだろうか。

どれも「地域」でよいのである。

さらにはこうもいえる。諸外国から見れば，「日本」や「アジア」も「地域」である。いやそれどころか，このさき出会うかもしれない宇宙人にとってみれば，この地球や太陽系でさえ「地域」になる。そしてその地域は，例えば国境や県境が変わることによって，その姿は変化する。地域は決して固定化された何らかの空間ではない。それは文脈によって見方によって，そして時代によって変わるものである。

いやむしろこう考えるべきものなのである。「地域」はそもそも，誰かが世界の一部を切り取ることによって浮かび上がってくるものであると。

何かを切り取らないと地域は出てこない（地域は境界性をもつ）。そして，その「切り取り方」にも色んなやり方があって，それは文脈にもよれば，時代によっても違う（地域は文化性・歴史性をもつ）。

いや，もっとこういうべきである。そもそも世界のすべてはつながっている。どこかで切れ切れになっていて，「地域」がきれいに分かれているなどということはない。すべてはつながっているのだが，そのつながっているもののなかから，何らかの固まりを切り出してきたときに「地域」は立ち現れる。しかもそれが，

全体の一部でありながら決して断片ではなく，それのみでなお一つの全体でありうるもの，それが地域である（地域は統一性・総合性をもつ）。

「地域」とはこうして，ゴロリとそこに横たわっているようなものではない。互いにつながりあっている世界の中から，何らかの固まりを見つけ，切り出してくる者がいるから「地域」になるのである。地域はだから，その「切り出してくる者」の立場やものの見方によって変わる。その者の見方がしっかりしていれば地域はしっかり示される。逆にその者の見方がぼんやりとしていれば，地域はぼんやりとしか見えないことになる。

さて，地域学の学びの中で，対象となる地域を世界の中から切り出してくる者——それこそがほかならぬ「私」である。どんな地域を切り取ることができるかは，「私」が世界をどう見ているかにかかっている。とすると，先の「足もとの地域を知ることが，自分を知ることにつながる」は，もう一度，別な形で裏返ることにもなるわけだ。すなわち，「地域を知るためには，自分を知らねばならない」と。

漠然と世界を見ているかぎり，地域についての認識もまた漠然としたものにしかならない。地域はそれを切り取る者の見方を反映する。地域を知ることと，私を知ることは同一の事象の裏表である。「地域ってなに？」と聞かれてその人が答えた答えの中に，その人自身が含まれる。地域学とは，地域と自分を同時に学び，深めていくことである。漠とした世界の中からしっかりと地域を切り出し，うまく見出すことができたなら，そのことによって自分自身の認識が深まったことになる。地域がよりよく見えるようになることとは，自分のものの見方を鍛え，自分という存在を高めていくことである。そしてそのように自分を高めることによって，地域もまた以前よりはっきりとその姿を現すようになっていく——。

もっとも，自分自身を高めるためといってしまえば，「学び」はみな同じである。地域学だけが特別なのではない。だが，地域学の学びには，他からは一歩進んだ，もっと大切なものが潜んでいる。このことを最初にきちんと確認しておこう。

人は必ずどこかの時空（時間・空間）に存在する。そして地域を切り取ることとは，ある特定の時空を一つの固まりとして切り出してくることである。

本来，空間は果てしなく広がり，時間は延々と切れ目なくつづく。その中からある場所を一つの地域として取り出すこととは，ものごとを時空の中に見定め，その見定めを行う自分自身を時空の中に確たる存在としてつなぎとめることである。逆に言えば，地域が見えない人とは，自分が存在している時空が見えていな

い人だということにもなる。

だが，単に時空を認識することが地域なのではない。より重要なのは次の点にある。

地域―― 一定の境界のうちにあり，歴史の中にあり，総合的である地域――は，単なる時空の認識ではない。それは，私の生をとりまく，様々なものごとの深いつながりである。地域とは，私が生きている条件，その環境，自分を生かしてくれている仕組みそのものである。地域を知るということは，単なる時空を，自分という存在を可能にしてくれる条件として描き出すことにほかならない。

地域学とは要するに，抽象的な言語や理論を学ぶものではなく，具体的な時空にいる私を，特定の生態環境のうちに照らし出していく，そんな学びの作業なのである。私を漠たる世界の中に確定し，地域のうちに，“生きているもの”として浮かび上がらせ，見定めていくこと――こうした作業を通じて現れてくる「私」のことを専門用語では，「アイデンティティ（自己同一性，自己同定性）」とか，「実存」などと表現するが，そうした自己同定作業のうち，最も基本となる作業が地域学である。

とはいえ，なぜこんなことが必要なのだろうか。

それはおそらく私たちがいま，とんでもなく大きな変化の中にいるからである。

それは，以前であればその存在が当たり前であった地域が雲散霧消してしまう結果さえもたらしそうな変化である。

都市の拡大は多くの村や町を押しつぶし，新興住宅地に変えてしまった。バイパス沿いのモールやインターネットによる通販の販売力は中心市街地の商店街を凌駕（りょうが）し，シャッター通りを生んでいる。首都や大都市の都心では地価の高騰とともに巨大な高層ビルが立ち並んで地域を一掃し，グローバル化は国の枠を越えて人々をごちゃ混ぜに攪拌（かくはん）しはじめている。むらやまちが壊れていく。都市の形がぼやけていく。この半世紀ほどの間に生じたことが，私たちの地域のあり方を根本から変え，人間存在のあり方を大きく変えつつある。

いやそれどころか，この日本という国のかたちさえ，このままでいられるのかわからぬほどの大きな変化を世界は遂げており，他方でナショナリズムの横行は，地域の形どころか国家の形，世界の形をさらに大きく変えていきそうである。

それゆえ，こういう人も多いのだと思う。「地域が大切なのはわかります。でも，私にはそんなふうに自分を見いだせるような地域がないんです」と。場合によっ

ては，それがコンプレックス（劣等感）になっている人も。いや，近年はむしろ開き直って「現在のような世界情勢の中では国家こそが大事であり，その内側にある地域なんか無用だ」と，そういう感覚でこの変化を見ている人も現れてきた。

だがそれでもなお，私たちはそれぞれ地域のうちに生きているのである。地域というものの上にしか，なおも私たちは生きられないと言った方がよいだろう。地域が見えない／不要だというのは，その人の見方が悪いからそうなるのにすぎず，人は必ずどこか特定の地域のうちに暮らしている。見えるはずのものが見えていない。必要なものが必要と思われていない——それをしっかりと見えるものにしていこうというのが，地域学の目指す目標である。

かつては地域は目の前に生き生きと存在し，それを学ぶ必要などないものだった。地域はそこにふつうに見えすぎるほど見えていた。いまやそれは学ばねば見えないものになっている。

現在起きている変化はとてつもなく大きく，その変化によって，本来ふつうに見えていたはずのものが濃い霧の向こうに隠れている。先ほど見方が悪いから地域が見えないのだと述べたが，必ずしもその人の努力が足りないから，能力が欠けているから見えないのではない。地域はいまや覆い隠されているのである。

この覆いをしっかりと取り除き，見るべきものを見えるようにしていくこと。地域学とは，そのための努力や技術が必要となった現代社会状況の中で，地域を適確に切り出し，とらえていくための認識法である。そしてその習得を通じて，自分自身の存在を確たる時空の上に取り戻すための学びである。

山下祐介『地域学入門』（ちくま新書，2021年）による。一部改変。